MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．１０．２９　発行元
第 411 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

中・高校生にお薦めの本その20

中学生、高校生にお薦めするミステリ本の紹介の２０回目。今回は新しい作品ではなく、少し前のものを取り上げてみることにした。時間が経っても中身の面白い作品はいつ読んでも面白いものだ。

10年20年前を振り返る

１０年、２０年前を振り返ると、今のようなＹＡやライト系を前面に出した出版物はそう多くなかった。私も担当している学校の教室にお薦めミステリを置こうと考えて実践していたが、思ったようには並べられなかった。

赤川次郎、山浦弘靖、田中雅美、辻真先、南房秀久、田代裕彦などと思い浮かぶ。まだ活躍中の作家もあれば、既に忘れられつつある作家もいる。作品そのものが手に入りにくくなっているかもしれない。ブックオフの棚を見ても、１０年以上前の作品は皆無に等しい。発行部数が少なく、消耗品に近い扱いで出回らないのだと思うし…。

右に取り上げた谷原秋桜子なども一時は期待された存在だった。今は何をしているのだろう……と思っていたら、別名義の方で活躍中とか…の噂も。不思議不思議…。

次回も少し以前の作品を選び出してみるかなと思っている。現在の若い人たちが知らない若い人たち向けのミステリということで。

谷原秋桜子「天使が開けた密室」

私は富士見ミステリー文庫で読んだ。２００１年。現在は創元推理文庫に収められている。高校一年生の「わたし」＝倉西美波が主人公。行方不明になった父親を探すための資金を得るためアルバイトをしている。ところが、バイト先で物を壊してしまって更に六十万円の借金を背負うことに。追い詰められていたので「寝ているだけで一晩五千円」の言葉につられて〇〇会社の××運搬の仕事に飛びついてしまう。そして、とうとう密室殺人事件に遭遇し、その容疑者にもなってしまうストーリー。元々はＹＡを意識して書かれた作品でありながら、思いの外良く出来た本格ミステリ。美波の活躍が読者を引き付けてくれる。

松尾由美「さよならハートブレイク・レストラン」

２０１６年光文社文庫書下ろし。『ハートブレイク・レストラン』『ハートブレイク・レストラン再び』に続く第三弾。物語の語り手・寺坂真以とレストランの隅に現れる名探偵ハルお婆ちゃんのシリーズ。既に亡くなっているハルさんの霊は見える人にだけ見える。第一話の『果物のある部屋の問題』は、衆人環視の警察署の刑事課長の席に突然現れたバナナの謎を解く話。その時の様子を聞きながら推理を進めるアームチェア・ディテクティブの形。各人の証言を集めていくとバナナに込められた思いが見えてくる。日常系に近い謎が多い。本書で真以と刑事の南野の仲が進展し、ハッピーエンドに繋がっていく流れである。

天野頌子『警視庁幽霊係と人形の呪い』

２００９年祥伝社のノンノベルス。このシリーズは２００５年がスタートで『警視庁幽霊係』がデビュー作。本書はシリーズ第五作に当たる。今、ライト系で流行りの「幽霊・あやかし系ミステリ」に多大な影響を与えた本。警視庁の特殊捜査室「お宮の間」。中心になっているのは柏木雅彦警部補。幽霊を見て話すことができる特殊能力の持ち主。本書ではマンモス団地で起きた火事が対象となる。亡くなった老婦人の霊から話を聞くことに…。現場に残された市松人形が重要なポイントになる。柏木警部補以外のメンバーも特殊な能力を持っているのだが、なかなかの曲者揃いなので、苦労の連続。

法月綸太郎『怪盗グリフィン絶体絶命』

２００６年講談社のミステリーランドの中の一冊として書き下ろされたもの。少年少女向けミステリとして構想されたもので、本自体もしっかりした作りであり、ケース、中扉なども工夫がなされ、丁寧な仕上がりの本。

冒頭、ニューヨークに住む怪盗ジャック・グリフィンの元に手紙が届く。「国際泥棒コンテスト・怪盗グランプリ」を開催するので、北米代表としてカリブ海のボコノン共和国のアロンゾ市に来てほしいという招待状だった。ホテルにはドン・ルイス・ベレンナ(ルパンが用いていた偽名)の名前で予約してあり、バーではニック・ヴェルヴェット(Ｅ・Ｄ・ホック作に登場する怪盗の名前)という名前のカクテルを注文するようにと指示が書かれているのも笑わせる。何か罠が仕掛けられているのでは…と疑わせるもの。さて、出掛ける前に一仕事。メトロポリタン美術館にある贋作のゴッホの絵を本物と入れ替えるというもの。国家の威信がかかっているという。グリフィンの大活躍が楽しめる作品。